

動物の飼育・ふれあいを通して心を豊かにする取組

林 禎 久

1 はじめに

本校では、動物の飼育、動物とのふれ合いによって子どもたちが得られる体験には、生物を愛護する態度、生命を尊重する態度を醸成するだけでなく、これらを通じて、豊かな人間関係を磨くために必要な心の礎を、子どもたちが築くことができるものと考え、本校の教育活動の重要な位置づけとなっている。



2 本校について

生活科の学習を行っている、1年生は1クラスあたり30人ほどの4学級、2年生は1クラス

あたり25人ほどの3学級となっている。

子どもたちが、生活科の授業や、教室で日常的にふれ合い活動を行うために、5、6人で1頭のモルモットのお世話をできるようにしている。2年生がお世話をしている15頭のモルモットに加え、今後、1年生がお世話をできるようになるときに備えて、さらに5頭の子どものモルモットを育てている。

I 本校について

中野区立白桜小学校

- 沿革
2009年4月
2つの小学校が統合して開校
- 児童数 543人（18学級）
- 研究の取組
○令和2・3年度
東京都教育委員会
小学校動物飼育推進校
○令和2・3・4年度
中野区教育委員会
「学校教育向上事業」研究指定校



2 実践の目的

昨年度から東京都教育委員会の小学校動物飼育推進校の指定校となったので、えさの購入等の金銭面での支援だけでなく、中野区獣医師会との強靱な連携が可能となった。

同時に、昨年度から来年度の3年間で、中野区教育委員会の「学校教育向上事業」の研究推進校の指定も受けていることから、モルモット

II 実践の目的

【都教委】小学校動物飼育推進校

生活経験、既習の内容を基盤に、得られた動物の飼育や動物とのふれあいを通じて、生き物を愛護する態度や生命を尊重する態度を涵養する。



【区教委】

「学校教育向上事業」研究指定校

生活経験、既習の内容、観察・実験の結果等に基づいて学習集団(学級)ごとに合意形成を行う学習活動を通じて、子どもたちの論理的思考力を高めるとともに、自然現象を読み解きながら読解力の基盤を築く。

とのふれ合いの学習について、問題解決の過程を大切にしたい授業づくりも進めてきた。

3 お世話の方法

モルモットとのふれ合いや飼育の体験の機会を設け、子どもたちの生き物を愛護する態度や生命を尊重する態度を涵養することに加え、モルモットとの関わりを大切にしたい学習活動を通じた問題解決の力の育成も目指している。

モルモットとのふれ合い活動を推進する上で、飼育活動を切り離すことはできない。小学校学習指導要領解説生活編では、動物を飼ったり植物を育てたりする活動によって、「生き物への親しみをもち、生命の尊さを実感するために、継続的な飼育・栽培を行うことには大きな意義がある」と示している。

III お世話の方法

○2年生による教室でのふれあい活動、飼育活動

- ・新型コロナウイルス感染症についての朝の健康観察の後、当番の子どもが飼育小屋に迎えに行く。
 - ・放課後、当番の子どもが教室から飼育小屋に送っていく。
- (1月から2月にかけて、1年生による同様の活動を少しずつ増やしていき、3月からは1年生が2年生に代わり、ふれあい活動、飼育活動を中心に行う。)

○飼育委員会による飼育活動

- ・朝、2年生がモルモットを各教室に連れて行った後、中休みと昼休みに飼育委員会の当番が飼育小屋の清掃、水換え、えさの補充等を行う。



飼育・栽培の中でも、動物の飼育は、1、2年生の子どもたちだけでは十分に活動を行うことはできない。そこで、教職員の支援に加え、飼育活動に高い興味・関心を有し、一定の飼育

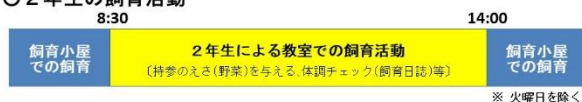
に必要な技能を有している高学年の子どもの集団である「飼育委員会」の活動、飼育のアドバイスや診療を行うことのできる獣医師による支援等が必要と考えた。

モルモットとのふれ合い活動を進める上で、配慮しなければならないことの一つに動物アレルギーへの対応がある。本校は、モルモットを教材とした生活科の学習を推進して2年となったが、モルモットについてのアレルギーを有する子どもが見られたことから、日常的なふれ合い活動と、アレルギーの存在との両立を考えなければならなかった。

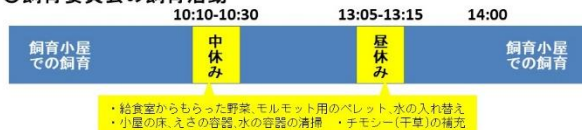
そこで、登校してから帰るまでの間、教室で2年生の子どもたちがふれ合えるようにし、それ以外の時間は飼育小屋で飼育を行うようにした。

Ⅲ お世話の方法

○2年生の飼育活動



○飼育委員会の飼育活動



○その他の飼育活動

- ・休日・祝日・夏休み等の長期休業日は、教職員や学校施設管理職員(委託)が担当
- ・冬季休業日は、希望する2年生が各家庭に持ち帰る

こうすることで、1、2年生の子どもたちが教室でモルモットと接触する時間を最大6時間以内に留めることができるので、動物アレルギーを有する子どもがいる学級でも、子どもたちがモルモットとふれ合う方法を工夫する素地をつくることができると考えた。飛散すれば長時間にわたって存在することになる体毛が、教室内に広がることを可能な限り避けることができる。併せて、飼育委員会に所属する高学年の子どもたちも、飼育小屋でモルモットの飼育に継続的に関わるのが可能となり、飼育の体験活動を他の学年の子どもにも広げることができた。

飼育のアドバイスや診療を行うことのできる獣医師による支援については、東京都教育委員会の小学校動物飼育推進校を指定されたことから、中野区獣医師会の全面的なバックアップを受けられるようになった。このことにより、本校の動物飼育の充実について多大なる支援

を得ることができている。東京都教育委員会の小学校動物飼育推進校の指定が本年度までとなっているので、現在のような充実した動物飼育の環境が来年度以降も継続できるようにすることが喫緊の課題となっており、中野区教育委員会でも検討しているところである。

4 生活科での主な授業実践

続いて、1、2年生の生活科の学習で、モルモットとのふれ合いや飼育の活動を通して子どもたちの心を豊かにする取組について説明する。

小学校低学年での子どもたちは、自分の生活体験をもとにした考え方や、取組を行う傾向が強く見られる。つまり、子どもは生活経験を基盤とした、モルモットのお世話の仕方やふれ合う方法を考える傾向にあるといえる。

本校ではモルモットについて、子どもたちの経験を礎とした視点だけではなく、モルモットの視点に立って、これまでのお世話の仕方やふれ合う方法を振り返り、他の視点から関わりについて捉えることができるようにする学習について研究を進めてきた。これらの研究は、まだ端緒に就いたところであるものの、1年生と2年生の生活科でのモルモットを教材とした学習活動について紹介する。学習活動の様子については、2年生の実践で説明する。

1年生のモルモットを教材とした学習活動はプレゼン画面にある流れで行った。モルモットの視点で、飼育の方法を考えることを大切にしたい学習である。

Ⅳ 生活科での主な授業実践例

【1年生】モルモットの視点から 飼育の方法を考える

- ①教室の衣装ケースにモルモットを入れて飼育するために、どのような用意をするかを考える。
- ②生活経験に基づいた視点で発想するので、ベッドや机などの自分の家の中にある家具などを段ボールや画用紙で作成し、衣装ケースに配置する。
- ③帰るときに、準備した衣装ケースにモルモットを入れる。
- ④翌朝、作成した段ボールの家具が壊されていることから、モルモットにとって必要な飼育の方法を考える。

【2年生】モルモットの視点から ふれあいの方法を考える

- ①モルモットと一緒に2年生に進級して3ヶ月が経過した時点で、なかよしになれているかを振り返る。
- ②モルモットが楽しい、嬉しいと思っているかをとらえるためには、どうしたらよいかを話し合う。
- ③モルモットが嬉しいときと怒っているときとは、鳴き声が違っていることから、モルモットの鳴き声からどのような気持ちかが分かるのかを考える。
- ④いくつかある鳴き声をもとに、自分たちのふれあい活動をモルモットの視点になって評価し、よりよいふれあい活動について考える。

2年生のモルモットを教材とした学習活動については、プレゼン画面のように進め、モルモットの視点で、ふれ合いの方法を考えることを大切にしたい学習活動を展開した。

1 年生の冬の頃に 2 年生から引き継いだモルモットのお世話をするようになってから、半年が経過した 6 月に、これまでのモルモットの飼育やふれ合いの活動を通して、モルモットと仲良しになっているかを振り返る活動を行った。

IV 生活科での主な授業実践

【2 年生】モルモットの視点から ふれあいの方をを考える

活動 1

モルモットと一緒に 2 年生に進級して 3 ヶ月が経過した時点で、なかよしになれているかを振り返る。

みんなは教室でモルモットと一緒に過ごして楽しいようですね。モルモットも楽しいのでしょうか。

どのモルモットも、えさをたくさん食べてくれるから、楽しくすごしていると思う



頭を撫でてあげると、目を細めて気持ちよさそうにしているから、モルモットたちは楽しいと思うな。



ギョッとつままなければ、ひざの上で『キュイキュイ』って鳴いてくれるよ。



子どもたちは、

「どのモルモットも、えさをたくさん食べてくれるから、楽しくすごしている。」

「頭を撫でてあげると、目を細めて気持ちよさそうにしているから、モルモットたちは楽しいはず。」

「ギョッとつままなければ、ひざの上で『キュイキュイ』って鳴く。」

といった、モルモットとのふれ合い活動から得られたことについて具体的に話し、現在、自分たちがモルモットと良好な関係を築いていることを伝えようとした。

次に、モルモットが楽しい、嬉しいと思っているかをとらえるためには、どうしたらよいかを話し合った。

IV 生活科での主な授業実践

【2 年生】モルモットの視点から ふれあいの方をを考える

活動 2

モルモットが楽しい、嬉しいと思っているかをとらえるためには、どうしたらよいかを話し合う。

モルモットが楽しいとき、嬉しいときはどうすると分かるのでしょうか

ひざの上でおとなしくしているときは、嬉しいんじゃないかな。



「キュイキュイ」「キュキュキュ」って鳴いているときがあるけど、そのときは、楽しいのかな、嬉しいのかな



やさしくつかまないと「グルグル」って鳴いているね。



ここでは、モルモットが楽しい、嬉しいと思っていると考える姿を子どもたちと確認した。子どもたちは、「ひざの上でおとなしくしているとき.」、『キュイキュイ』や『キュキュキュ』

って鳴いているとき.」と言い出した。モルモットの気持ちや鳴き声に注目して、モルモットのしぐさを捉えようとしていることが分かった。

その一方で、「やさしくつかまないと『グルグル』と鳴いている。」にも気づいていることから、嫌な気持ちになっていたり、怒っていたりしていることについても、鳴き声と結び付けて理解していることも分かった。

続いて、モルモットの鳴き声とモルモットの気持ちの関係を整理し、これらのことを妥当としてよいかを、モルモットとのふれ合い活動を通して確認した。

IV 生活科での主な授業実践

【2 年生】モルモットの視点から ふれあいの方をを考える

活動 3

モルモットが嬉しいときと怒っているときでは、鳴き声が変わっていることから、モルモットの鳴き声からどのような気持ちが分かるのかを考える

モルモットは、どんな鳴き声で気持ちを伝えているのでしょうか。



モルモットが気持ちよくなるようにして、どんな鳴き声を出すのか調べてみるくはならないね。



そっと、頭を撫でてあげると、嬉しいときの鳴き声を聞くことができるかもしれないね。



子どもたちは、順番にモルモットを膝に置いたり、手で持ったりして、モルモットの様子について調べた。子どもたちは、「モルモットが気持ちよくなるようにして、どんな鳴き声を出すのか調べよう。」と活動した。

しかし、調べようとした鳴き声のすべてを授業時間内で確認することはできなかったため、授業後も続けて教室で調べることとなった。

最後に、モルモットの様子と鳴き声の関係をもとに自分たちのふれあい活動をモルモットの視点で振り返り、自分たちがどのような行動をとることが望ましいのかを考えるようにした。

この活動を通して、

- ・モルモットが嬉しそうにしているときは、「キュイキュイ」「プイプイ」って鳴くので、そのときの様子を大切にしよう。
- ・モルモットが怒っているときは「グルグル」と鳴くが、その時は持ち方がよくないときに見られることからモルモットの持ち方を変えるようにしよう。
- ・1 匹でいると、「クイックイッ」とよく鳴くか

ら、そのときは遊んであげよう。

と、モルモットの視点で、子どもたちはモルモットの気持ちを捉えるようになっていった。

このような意見を出し合うことにより、「モルモットは鳴き声を変えて、気持ちを伝えようとしている.」「鳴き声をよく聞いて、お世話を工夫するとよい.」と考えるようになり、自分本位の考えから、モルモットという言葉と話さない他者としての視点での考えに転換するようになった。

IV 生活科での主な授業実践

【2年生】モルモットの視点から ふれあいの方法を考える

活動4

いくつかある鳴き声をもとに、自分たちのふれあい活動をモルモットの視点になって評価し、よりよいふれあい活動について考える。



クラスでの日常的なふれ合いや飼育の活動を通して、「動物が生命をもって生きていること」を実感していくことに加え、モルモットの視点でこれまでの活動を振り返ることにより、「動物と自分との関わり方について気付くこと」を涵養できるようになったと考える。

5 飼育委員会によるふれあい活動

モルモットとのふれ合い活動は2年生を中心に進めているが、子どもたちがモルモットとふれ合うことを通じて得られることに、心を豊かにするなど、様々な効果があることが、2年生の実践から分かってきた。

このような、モルモットとのふれ合い活動を、すべての子どもたちに広げることができれば、心豊かな子どもの育成を学校全体で実現し、相手を思いやる心の醸成を、一層、推進することにもつながる。

飼育委員会のモルモットとのふれ合いの活動は火曜日に行っている。火曜日は2年生がモルモットを教室に連れて行かず、飼育委員会が飼育小屋とふれあい広場で、モルモットの飼育とふれ合いの活動を位置付けている。体育館の前に整備した、モルモットとのふれあい広場で、

午前10時頃の中休みと、午後1時頃の昼休みに、飼育委員会の委員が、希望する3年生以上の子どもの膝の上にタオルを置き、そこにそっとモルモットをのせるようにしている。膝にモルモットを載せた子どもは、2年生と同じよ

V 飼育委員会によるふれあい活動

○3～6年生を対象とした ふれあい活動

- ・校庭の東側に設けた「モルモットふれあい広場」で、飼育委員会の当番が、希望する3～6年生の子どもの膝にモルモットを乗せてふれあうようにする。



うに、モルモットの頭をなでたり、いとおしそうに見つめたりして過ごし、優しい言葉をかけたりしていた。動物とのふれ合いを大切にする心が醸成されていることが分かる。

1、2年生以外の高学年の子どもたちが、飼育委員会を通して行うことができるようになったことで、これまで希望者の少なかった飼育委員会が、今ではその委員になかなかすることが難しい、人気の委員会となっている。

このような、モルモットを教材とした教育活動を進めることで、動物への親しみをもち、世話をする楽しさや喜びを味わうことになり、動物に対する様々な思いや願いが膨らんでいく姿が見られるようになった。

また、自分本位ではなく、動物の立場に立って考えることができるようになるので、動物と



の接し方が変わっていくことになるが、このことは友達にも反映されるようになり、寛容な言動も見られるようになってきた。子どもたちの心も豊かになっていったものと考えてできた。

(中野区立白桜小学校校長)